



カヤネズミ (澤邊久美子撮影)

地域でのフィールド調査・研究の情報

生まれ変わった展示

副館長 高橋啓一

C展示室 琵琶湖博物館は 20 周年を迎えました。その間の研究や資料の蓄積^{ちくせき}を基にして、現在、展示を中心に、3 期に分けてリニューアルを進めています。最終的には 2020 年にグランドオープンする予定ですが、今年の 7 月 14 日にその第 1 期目の展示リニューアルが完成し、二つの展示室が生まれ変わりました。

そのひとつは C 展示室「湖のいまとわたしたち～暮らしとつながる自然～」です。琵琶湖地域を中心にした床一面の航空写真の展示を抜けて広い展示室へと進むと、目の前にヨシのある風景が広がります。ここではヨシ原のにおいや音を体験したり、ヨシの利用や保全のようすがわかります。湖から陸まで広がるヨシ帯は様々な生き物の生活の場でもあります。カヤネズミもそのひとつです。このコーナーでは、親指ほどの大きさの生

きたカヤネズミが、じょうずに細長い葉を丸めて巣を作っているようすを見ることができます。

次は田んぼの展示です。滋賀県の代表的な風景のひとつです。たくさんの生き物がこの田んぼという人間の営み^{いとな}を利用して生活しています。そんな人と生き物の関係を紹介するこのコーナーには、生きているナゴヤダルマガエルや長さが 80 cm にもなるハッタミミズがいます。

展示は、徐々に川をさかのぼりながら森へと移ります。川や森は、湖に豊かさをもたらしてくれる一方で、水害が起こったり、カワウやニホンジカなどが増えすぎたことで問題が起こります。展示ではこうした森や川と人とのさまざまな関係を、たとえばゲームやタッチパネルの情報検索を使って、



図 1 : C 展示室のようす

楽しみながら来館者といっしょに考えます。

従来の展示で人気の高かった昭和 30 年代の民家（富江家）の再現は、今では見られなくなった人々と自然とのつき合い方を引き続き語ってくれます。また、C 展示室の真ん中には、これまで琵琶湖博物館で集めてきた生き物の実物標本コレクションや学芸員の最新の研究の様子がわかるコーナーも加わりました。

水族展示室

2 階にある C 展示室の次は 1 階の水族展示「湖のいまとわたしたち～水の生き物と暮らし」です。最初の水槽はフナやタナゴなど内湖・ヨシ原にすむ生き物たちを展示しています。以前に比べると奥行きが広がり、水面も高くなってヨシを行き来する魚のようすがよくわかるようになりました。

トンネル水槽の展示も新しくなりました。まるで湖の深い水中にいるようです。銀色に光り輝くビワマスの泳ぐ姿を一年中見ることができます。

魚屋さんの展示も登場しました。店に入るとたくさんの湖の幸が並んでいます。湖の生き物たちがずっと昔から私たちの暮らしと結びついていた

ようすが改めてわかります。また、川の下流を模した水槽では、季節に応じて生き生きとしたさかなの生態が見られる新展示を試みます。

これまで世界の湖の魚を紹介していた展示は、「古代湖の世界」として生まれ変わりました。琵琶湖は 400 万年以上の歴史がある古代湖です。ここでは、古代湖の中でも古い歴史を持つロシアのバイカル湖やアフリカの古代湖を紹介しています。バイカル湖の展示では、協定を結んでいるバイカル博物館の全面的な協力があり生きた現地の魚や甲殻類を展示することができました。世界で唯一淡水にすむアザラシであるバイカルアザラシもいます。愛らしい、くりっとした大きな目は進化の過程で獲得したものです。

魚やザリガニを触ることができる「ふれあい体験室」を抜けると、「マイクロアクアリウム」です。このコーナーの入り口では、高さ 2 m ほどの巨大な銀色に光るノロミジンコの拡大オブジェが迎えてくれます。成安造形大学と共同で制作しました。その奥では、プランクトンなどの小さな生き物を顕微鏡や映像で楽しめます。わくわくして新しい発見のある展示ができました。



図 2：トンネル水槽のようす



図 3：バイカルアザラシ水槽のようす

「マイクロアクアリウムの壁画制作」に関する成安造形大学での様々な情報

成安造形大学 イラストレーション領域 准教授 小田 隆

琵琶湖博物館と成安造形大学では、マイクロアクアリウム展示の制作に関する共同プロジェクトを進めてきましたが、その中でも特に「マイクロアクアリウムの壁画制作」について紹介します。

筆者はこれまで博物館と多くの仕事をしてきましたが、学生たちにとっては初めてのことばかりで、特に研究者とのやりとりなど慣れないことも多かったようです。とはいえ、根幹の部分ではデザインやイラストレーションの仕事と変わるところはなく、クライアントのイメージをどれだけ正確に反映できるかという部分が問われます。

今回、館からの要望として、実際に琵琶湖の微生物をよく観察してほしいというものでした。論文の図版やこれまでに描かれたものをベースにするのでは



図1：学生によるスケッチ

なく、まさに原典である生きた標本に接することが重視されました。プランクトンネットを使った微生物の採集。顕微鏡による観察とスケッチ。館でオリジナルに撮影した動画の数々。肉眼では見えない世界を大きな壁画に表現するため、学生たちは大いに頭を悩ますことになりました。積み重ねられた多くのプロセスを、完成した壁画から読み取っていただければ、取り組んだ学生たちにとっても大いに励みになると思います。

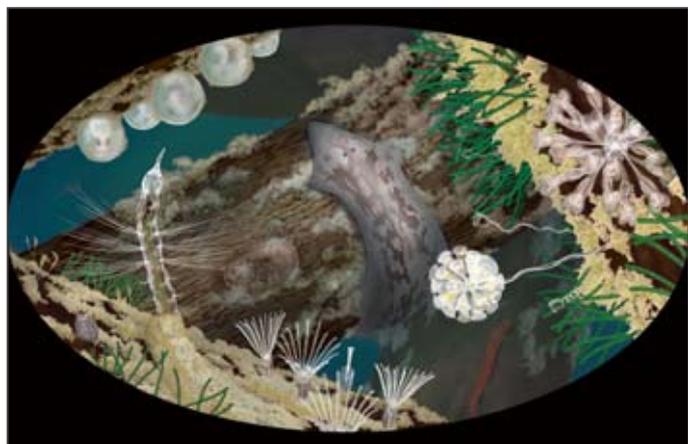


図2：底生生物壁画、完成が近づいてきた

博物館からみた「マイクロアクアリウムの壁画制作」

特別研究員 楠岡 泰



写真1：博物館でプランクトンを観察する学生

琵琶湖博物館の新しい展示空間「マイクロアクアリウム」を計画中、アートの視点でミクロな生物を紹介できないかと思案していました。そこで以前から「プランクトンでアート」と題して、生きたプランクトンを顕微鏡で観察し、それを元にアート作品を作るイベントを一緒に実施していた成安造形大学の宇野君平先生に相談しました。その結果、同大学の学生さんにオブジェおよびレリーフ、壁画、椅子を作ってもらう三つのプロジェクトを立ち上げることになりました。

小田隆先生ひきいる壁画チームはプランクトン（浮遊生物）および付着生物の世界を表現しようと、二つの壁画を描くことになりました。壁画を描く資料として、学生はまず、博物館でプランクトンや水草を採集し、顕微鏡を覗きながら気に入った生物を詳細にスケッチしました。しかし、スケッチを実際にやってみると、顕微鏡を通して細部が観察できないことがよくあったので、最終的にスケッチを組み合わせて実際の壁画を描く段階になって、頻繁に学生さんからの問い合わせがありました。自分の専門分野の繊毛虫（原生生物）でしたらある程度分かりますが、それ以外の

生物に関しては専門書を何冊もめくり、詳細が分かる写真やスケッチを探すことになり少し困ることもありましたが、なんとか世界のどこにもない壁画が完成したと思います。



写真2：成安造形大で学生が描いたスケッチにコメントする学芸員

【資料裏話 その21】 魅力がいっぱい、ヨシ松明！

嘱託職員 三樹友梨香

新しいC展示室のヨシ原コーナーでは、火祭り行事に登場する、近江八幡市のヨシ松明が展示されます。その目玉は、近江八幡市で松明づくり名人として有名な、浅小井町の井上常政さんとお孫さんの恵輔さんに製作していただいた開き松明（笠松明）です。開き松明は、上部につくられた円い笠が特徴です。

青田刈りのモチワラを使った鮮やかな手ないの縄、皮をむかれた艶のあるヨシの表情・・・など、他にもご紹介したい魅力はまだあります。ぜひC展示室でじっくりご覧ください！

写真は、製作途中の笠の裏側です。竹の輪に沿って、ヨシを一本ずつ等間隔に並べ、丁寧にくりつけていきます。結び目が整然と並んでいて美しいですが、実は松明を立てると見えなくなってしまう。このような見えないところにも、名人の丁寧な手仕事やこだわりが隠れているのです。



裏側もこんなに美しい！

● 編集後記 ●

今号が発行される頃には、いよいよ博物館がリニューアルオープンとなります。博物館が総力を結集して新たな展示を企画しておりますので、ぜひ、県内外から多くの方にご来館いただきたいと思います。(まつ)

● 鳥の目 魚の目 クイズ ●
「日本最長！」

滋賀、石川、福井の3県のみで生息が確認され、長さが90cm以上にもなる日本最長のミミズとは？ 答えは、紙面のどこかにあります。

- ① ハッチョウミミズ
- ② バッタミミズ
- ③ ハッタミミズ

◆ 巻頭写真の説明 ◆

カヤネズミ：人の親指ほどの大きさしかない、日本最小のネズミです。休耕田や河川敷き、ヨシ原などの背の高い草むらに生息しています。新しくなった展示では生きている様子が見られます。